

日本語学習者による複合動詞の意味推測の特徴 —多肢選択式における選択パターンの分析から—

谷内 美智子

What are the characteristics of inferring the meaning of Japanese compound verbs by Japanese language learners on a multiple-choice test?

YACHI Michiko

This study investigated the characteristics of inferring the meaning of Japanese compound verbs on a multiple-choice test from these following points; (1) how much the original meaning of single verb remains in compound verbs, (2) quantity of context, and (3) Japanese language proficiency. 54 participants were asked to guess the meaning of target words under three conditions, the word in isolation, word within a simple sentence and word within a complex sentence. The main findings are; [1] There are many types of multiple-choice selection patterns when the meaning of first and second verbs do not remain in the compound verb, or when the Japanese language proficiency is lower; [2] The higher the Japanese proficiency level, the more the multiple-choice selection patterns which include “correct answer” are found. In the process of inferring the meaning of words, vocabulary knowledge, grammar knowledge, and information obtained from context are referred to verify the correctness of the inferred meaning. It is more advantageous for the learners with higher proficiency to infer the correct meaning of words because it makes easier for them to get the information from context with rich language knowledge. The result of this study may reflect the difficulty of verifying the inferred meanings in the process of inferring the meanings of compound verbs.

1. はじめに

日本語の複合動詞は言語学的に複雑な現象であり、日本語学、言語学の両面から研究が盛んにおこなわれてきた（松田 2002a）。また日本語の複合動詞は日本語学習者にとっても学習困難な語として知られている。日本語の複合動詞の習得研究は「入りこむ」「塗りこむ」など、後項動詞「～こむ」を対象にした松田（2001, 2002b）の研究から始まったと言える。「～こむ」から始まった複合動詞の習得研究は、現在はコーパス分析（ヴォイニコヴァ 2017；陳 2010 など）、教材分析（小森 2015）、習得状況の調査（何 2010a）、学習対象の複合動詞の選定（照山 2009）など多岐にわたっている。

複合動詞が学習困難な理由として、複合動詞は学習の機会自体が少ないこと（森田 1978；郭・徳井2010）、複合動詞としての可能な動詞の組み合わせが複雑であること（何 2010b）、複合動詞になったときに単独動詞としての意味がどの程度保持されているかによって指導のポイントが異なること（永井 1996）があげられる。松田（2000）によると日本語学習者が未知の複合動詞に出会ったときは前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジーを用いることが明らかとなっている。しかし、複合動詞は単独動詞としての意味がどの程度残っているかが複合動詞によって異なるうえに（永井 1996；姫野 1999）、どの程度単独動詞としての意味が残っているかを形態的に判断することは不可能である。そのことから、未知の複合動詞に出会ったときや、複合動詞に含まれるそれぞれの単独動詞は知っていてもそれらの動詞の組み合わせが新規なものときは、前項動詞と後項動詞の意味を足すことで当該の複合動詞の意味として成立するかを見極めることが必要であると言える。そして前項動詞と後項動詞の意味を足しても当該の複合動詞の意味が成立しない場合には、文脈からの情報も参考にしながら意味を推測するという過程が必要になる。つまり複合動詞の中でどの程度単独動詞の意味が残っているかということと、文脈からの情報が意味推測に必要なかということは、相互補完的な関係にあると言える。

複合動詞を対象にした語の意味推測研究では、単独動詞としての意味がどの程度残っているかによって意味推測の正確さが影響を受けること、そして単独動詞としての意味が残っていない複合動詞のほうが、正確に意味を推測する際に文脈からの情報が必要であることが明らかとなっている（谷内 2012, 2019；谷内・小森 2009）。また、日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できることも報告されている（谷内 2012, 2019；谷内・小森 2009）。

これまでの複合動詞意味推測研究では「どのような条件であれば正確に意味

を推測できるようになるか」を扱ったものが中心である。しかしながら、正確さ以外の点、すなわち、どのようなときに誤った意味を推測しやすいのかといった点については不明な点が多い。複合動詞の意味推測では前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているのか、意味推測時の文脈量、日本語習熟度が影響していることから、正確な意味だけでなく誤った意味の推測にも含めて、これらの3つの要因がどのように影響しているかを検討することで、複合動詞の意味推測の実態をより明らかにすることができるだろう。このことを踏まえ、本研究では日本語学習者が推測する複合動詞の意味がどのように変わるかを、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているか、意味推測時の文脈量、日本語習熟度のそれぞれの関係から検討していく。

2. 先行研究

日本語の複合動詞の分類は大きく分けて次の三つである。一つめは複合動詞の前項動詞と後項動詞の意味がどの程度保持されているのかという分類である(寺村 1984)。二つめは統語的複合動詞と語彙的複合動詞という「語形成」の観点からの分類である(影山 1993)。三つめは統語的複合動詞と語彙的動詞のそれぞれについて、複合動詞の中で単独動詞としての意味がどの程度残っているかという観点から分類した姫野(1999)の分類である。姫野(1999)の分類は寺村(1984)と影山(1993)の両者の分類を統合し、より日本語教育的な観点に立ったものである。ここでは統語的複合動詞と語彙的複合動詞の概要を説明してから、姫野(1999)の分類の詳細を述べる。

統語的複合動詞と語彙的複合動詞の違いは、前項動詞と後項動詞が統語的な操作で結合しているかどうかにある。統語的複合動詞は前項動詞が後項動詞の項となり、「読み終わる」は「読むことが終わる」、「書き始める」は「書くことを始める」、「使い慣れる」は「使うことに慣れる」に操作することができる。また、統語的複合動詞を形成する後項動詞は30語に限定されており、単独動詞としての意味と後項動詞として使われる意味が同じものもあれば異なるものもある(表1)。

語彙的複合動詞は後項動詞が前項動詞の項にはならないものを指し、前項動詞と後項動詞の意味関係から、「手段」「状態」「原因」「並列」「補文関係」「副詞的關係」に分けられる。姫野(1999)は影山(1993)の分類を踏まえ、単独で使われるときの意味(本義)がどのような形で生かされているかという観点からの分類を提唱している(表2)。

表1 統語的複合動詞を形成する後項動詞

始動	～かける、～だす、～始める、～かかる
継続	～まくる、～続ける
完了	～終える、～終わる、～尽くす、～きる、～通す、～抜く、～果てる
未遂	～そこなう、～損じる、～そびれる、～かねる、～遅れる、～忘れる、 ～残す、～誤る、～あぐねる、～そこねる
過剰行為	～過ぎる
再試行	～直す
習慣	～つける、～なれる、～飽きる
相互行為	～合う
可能	～得る

※影山（1993）、姫野（1999）、姫野（2001）を参考に作成

表2 姫野（1999）の複合動詞の分類

	語彙的複合動詞	統語的複合動詞
(1) 二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる		
(a) 並列関係	～して～する ～したり～したりする ～して、その結果すなわち～する（ことになる） 等	
継起	流れ着く→流れてから着く	【なし】
手段・原因	焼け死ぬ→焼けることにより死ぬ	【なし】
付帯状況	遊び暮らす→遊びながら暮らす	【なし】
並起	泣き叫ぶ→泣いたり叫んだりする	【なし】
類似	書き記す→書いてすなわち記す	【なし】
(b) 比喩的關係	～するようにして、～する 書き殴る→まるで殴るように乱暴に書く	【なし】
(c) 主述、補足の関係	～することが／を／に～する	
主述	あり余る→あることが余る	働き過ぎる→働くことが過ぎる（＝過度だ）
補足	出し惜しむ→出すことを惜しむ	歩き始める→歩くことを始める
(2) 後項動詞をほかの言い方にする		
	投げ込む→投げて、中に入れる	話し合う→互いに話す
(3) 前項動詞をほかの言い方にする		
	打ち切る→継続状況を途中で切る（＝終了する）	【なし】
(4) 二つの動詞とも他の言い方にしなければならない		
	落ち着く	【なし】

※姫野（1999:19-22）をもとに作成

姫野（1999）では、複合動詞の前項動詞と後項動詞の意味構成を文に言い換えている。語彙的複合動詞は（１）二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる、（２）後項動詞をほかの言い方にする、（３）前項動詞をほかの言い方にする、（４）二つの動詞とも他の言い方にする、の四通りに分けられる。統語的複合動詞は（１）二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる、（２）後項動詞をほかの言い方にする、の二通りに分けられる。このように語彙的複合動詞と統語的複合動詞を比べてみると、言い換えのパターンは語彙的複合動詞の方が圧倒的に多い。

複合動詞を対象にした意味推測研究では、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているのが推測した意味の正確さに影響するということが明らかになっている。例えば統語的複合動詞を対象にした谷内（2012, 2019）では、後項動詞の意味が単独動詞の時の意味とは異なる統語的複合動詞よりも、前項動詞と後項動詞の意味が残っている統語的複合動詞は正確に意味を推測できることが明らかとなっている。しかし、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかが意味推測の正確さに影響するとはいっても、実際の意味推測では意味推測時の文脈量や日本語習熟度の高低も意味推測の正確さに影響を与えることが明らかとなっている（谷内 2012, 2019；谷内・小森 2009）。

これまでの意味推測研究は「意味推測の正確さ」に重きを置いているが、意味推測の際には、正確ではなくても何かしらの意味を推測していると考えられる。前項動詞と後項動詞の意味が残っている複合動詞の意味を推測する場合、元の動詞の意味が既知であれば常に正確に意味を推測できるため、文脈量や日本語習熟度に関係なく同じ意味を推測するであろう。一方、前項動詞か後項動詞のどちらかしか意味が残ってない、もしくは両方とも残っていない場合は、文脈からの情報を活用することが必要なうえに、文脈からの情報を活用するには一定以上の日本語習熟度が必要となる。そのことから意味推測時の文脈量や日本語習熟度によって推測される意味が異なってくると考えられる。

3. 研究課題

複合動詞を対象にした意味推測研究では、特に前項動詞と後項動詞の意味が両方とも残っている場合、常に正確に意味を推測できることが明らかとなっている。しかしながら表2の姫野（1999）の分類からもわかるように、複合動詞は前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかは複合動詞によって異なる。ここから、前項動詞と後項動詞の意味が残っている複合動詞ほど意味推測

時の文脈量や日本語習熟度の高低に関わらず推測される意味に大きな違いはなく、前項動詞と後項動詞の意味が残っていない語ほど、意味推測時の文脈量と日本語習熟度の高低で推測される意味に違いが出てくるものと考えられる。このことを踏まえ、本研究では次の研究課題を設定する。

研究課題1 推測される複合動詞の意味は、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかによってどのように変わるか

研究課題2 推測された複合動詞の意味にどのような傾向がみられるか

4. 研究方法

4.1 実験計画

本研究では複合動詞の種類、文脈量、日本語習熟度の三つの要因を設定した。一つめの「複合動詞の種類」は被験者内要因で、(1) 前項動詞と後項動詞の両方とも元の動詞の意味が残っている、(2) 前項動詞か後項動詞のどちらかが言い換えられている、(3) 前項動詞と後項動詞の両方が言い換えられている、の3水準である。二つめの「文脈量」は被験者内要因で、①調査対象語のみの提示(以下、単独提示条件)、②調査対象語を単文の中で共起語とともに提示(以下、単文提示条件)、③調査対象語を複文の中で共起語および意味推測を促す情報とともに提示(以下、複文提示条件)の3水準である。三つめの「日本語習熟度」は被験者間要因で、上位、中位、下位の3水準である。

4.2 調査対象者

本研究では谷内(2012)と同一の調査対象者を分析対象とした。本研究での調査対象者は54名で、モンゴル国国内の大学に在籍する中上級レベルの日本語学習者である。母語は全員モンゴル語で、日本語習熟度の測定にはSPOT(ver. D, E)を用いた¹。SPOT(ver. D, E)の平均値等は表3に示したとおりである。分析対象者の日本語習熟度の群分けも谷内(2012)に従い、平均値+0.5標準偏差(48)以上の得点群を上位群、平均値-0.5標準偏差(38)以上から+0.5標準偏差(48)未満の得点群を中位群、平均値-0.5標準偏差(38)未満の得点群を下位群として弁別した。

表3 SPOT (ver. D, E) の得点

	平均	最大	最小	標準偏差	N
全体	42.44	59.00	20.00	9.65	54
上位	52.53	59.00	48.00	3.55	19
中位	43.00	47.00	38.00	2.98	17
下位	31.28	37.00	20.00	4.76	18

※60点満点

4.3 調査対象語

本研究の調査対象語は複合動詞29語で、内訳は統語的複合動詞が13語、語彙的複合動詞が16語である。調査対象語の選定は影山（1993）、影山・由本（1997）、姫野（1999）などを参照し、次の基準に当てはまることを条件とした。

- ①前項動詞と後項動詞のもとになっている単独動詞が日本語能力試験の出題基準（国際交流基金・日本国際教育支援協 2002 以下、『出題基準』）の2級から4級の語で構成されていること
- ②語彙的複合動詞の場合、後項動詞が統語的複合動詞を形成する後項動詞とは異なること
- ③語彙的複合動詞の場合、現代語として使われるときの意味が多義ではないこと

これらの条件に該当した複合動詞29語を、表2に示した姫野（1999）の分類に沿って分類した（表4）。なお、姫野（1999）で分類されている「前項動詞をほかの言い方にする」複合動詞は今回の分析対象には含まれなかった。

表4 本研究の調査対象語

前項動詞と後項動詞の両方とも元の動詞の意味が残っている	
統語的 複合動詞	書き忘れる、聞き飽きる、しゃべり続ける、出し遅れる、使い慣れる、話し終わる、読み始める
語彙的 複合動詞	押し開ける、切り倒す、切り分ける、たたき割る、運び入れる
前項動詞か後項動詞のどちらかが言い換えられている	
統語的 複合動詞	歩き過ぎる、数え直す、頑張り通す、助け合う、泣き出す、登り切る
語彙的 複合動詞	居合わせる、買い戻す、捨て去る、出払う、泣き落とす、飲み歩く、笑い飛ばす
前項動詞と後項動詞の両方が言い換えられている	
語彙的 複合動詞	あり付く、言い寄る、言い渡す、行き渡る

※本研究では前項動詞が言い換えられている複合動詞は含まれなかった。

4.4 調査材料

本研究では単独提示条件、単文提示条件、複文提示条件の三つを意味推測条件として設けた。単独提示条件は単独意味推測テストとして調査対象語のみを提示した。単文提示条件と複文提示条件は文脈内意味推測テストとして、それぞれ単文と複文の中で調査対象語を提示した。提示文作成の際は『格フレーム検索』や『現代書き言葉均衡コーパス少納言』などコーパスを参照しながら、『出題基準』の3級、4級の語を中心に作成した。また、調査対象語や提示文に使われている漢字には全てルビをつけた。

谷内（2012）と同様、本研究でもモンゴル語で意味を提示した多肢選択式を採用した。選択肢は正答のほかに誤答選択肢を3つ作成した（表5）。また、本研究では調査対象者にすべての調査対象語を、単独提示条件、単文提示条件、複文提示条件のすべてで提示している。そのことから順序効果を排除するため、文脈内意味推測テストは提示順を入れ替えた冊子を4種類作成した（表6）。

表5 調査材料の例（「もみ消す」の場合）

提示文	単独	もみ消 ^け す
	単文	社 ^{しゃ} 長 ^{ちやう} はその事 ^じ 件 ^{けん} を <u>もみ消^けした</u> 。
	複文	先 ^{せん} 月 ^{げつ} の事 ^じ 件 ^{けん} は社 ^{しゃ} 長 ^{ちやう} の息 ^{むすこ} 子 ^こ がおこしたもので、社 ^{しゃ} 長 ^{ちやう} はその事 ^じ 件 ^{けん} を <u>もみ消^けそう</u> とした。
選択肢	選択肢1 （正答）	Олон нийтэд дэлгэрүүлэхгүй байх [世間に広まらないようにする]
	選択肢2	Мөрийг нь базангаа өвчинг арилгах [肩を揉みながら痛みを消す]
	選択肢3	Бүр мөсөн мартах [完全に忘れる]
	選択肢4	Бүгд сайн мэдэж байгаа [みんながよく知っている]

表6 文脈内意味推測テストの冊子の構成

テスト①	テスト②	テスト③	テスト④
統語（単文）	統語（複文）	語彙（単文）	語彙（複文）
語彙（複文）	語彙（単文）	統語（複文）	統語（単文）
統語（複文）	統語（単文）	語彙（複文）	語彙（単文）
語彙（単文）	語彙（複文）	統語（単文）	統語（複文）

4.5 調査時期と手続き

調査時期は2008年9月と2009年5月である。調査はどちらの時期も同一の手続きで、授業時間を利用して実施した。まず初日にSPOTと単独意味推測テストを行い、その3日後に文脈内意味推測テストを行った。文脈内意味推測テストの冊子は4種類をランダムに配布した。単独意味推測テストと文脈内意味推測テストの実施の際は、①正しいと思った意味を選択肢から選ぶこと、②辞書は使用できないこと、③前のページには戻ることとはできないこと、以上の三点をテスト冊子の中でモンゴル語で教示し、さらに口頭でも注意を喚起した。

4.6 分析方法

分析は意味推測条件によって選ばれる選択肢が同じか否かという観点から行った。具体的には、それぞれの調査対象語で意味推測条件ごとに選択した選択肢を選択パターンという形で集計した。なお、誤答の選択肢で選ばれている選択肢が同じか否かは「誤答(a)」「誤答(b)」のように示した。つまり、個々の調査対象語で単独提示条件、単文提示条件、複文提示条件での選択パターンが「誤答3 ⇒ 誤答3 ⇒ 誤答3」や「誤答1 ⇒ 誤答1 ⇒ 誤答1」のように、調査対象者によって選ばれている選択肢が異なっている場合でも、同一の調査対象者の中で意味推測条件ごとに選ばれている選択肢が同じ場合は「誤答(a) ⇒ 誤答(a) ⇒ 誤答(a)」のようにまとめた。同様に「誤答2 ⇒ 正答 ⇒ 誤答2」や「誤答1 ⇒ 正答 ⇒ 誤答1」のような選択パターンは「誤答(a) ⇒ 正答 ⇒ 誤答(a)」のようにまとめた。

5. 結果

5.1 研究課題1：推測される複合動詞の意味はどのように変わるか

研究課題1「前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかによって、推測される複合動詞の意味はどのように変わるか」の結果を、調査対象語ごとの選択パターンの数から見ていく。表7に示したのは、調査対象語ごとに見られた選択パターンの数である。

表 7 調査対象語ごとの選択パターンの数

			選択パターンの数			
			全体 (54名)	上位 (19名)	中位 (17名)	下位 (18名)
二つ残っている	語彙	押し開ける	8	4	5	7
		切り倒す	6	1	4	5
		切り分ける	5	3	4	4
		たたき割る	10	4	7	8
		運び入れる	7	4	5	6
	統語	書き忘れる	4	1	3	4
		聞き飽きる	10	4	6	7
		しゃべり続ける	4	1	4	3
		出し遅れる	11	6	5	9
		使い慣れる	7	2	5	6
		話し終わる	6	1	5	4
		読み始める	5	3	3	4
	選択パターン数平均		6.92	2.83	4.67	5.58
前項か後項のどちらかが残っている	語彙	居合わせる	9	4	7	5
		買い戻す	14	8	9	9
		捨て去る	11	4	5	7
		出払う	14	9	10	10
		泣き落とす	11	8	7	7
		飲み歩く	13	8	8	11
		笑い飛ばす	11	6	6	10
	統語	歩き過ぎる	10	2	5	7
		数え直す	12	11	7	5
		頑張り通す	8	2	6	5
		助け合う	9	4	7	9
		泣き出す	12	7	9	10
		登り切る	10	7	6	6
	選択パターン数平均		11.08	6.15	7.08	7.77
二つとも言い換え	語彙	あり付く	13	7	7	8
		言い寄る	12	9	11	8
		言い渡す	11	7	7	8
		行き渡る	11	5	6	5
	選択パターン数平均		11.75	7.00	7.75	7.25

「二つ残っている」「前項か後項のどちらかが残っている」「二つとも言い換え」のそれぞれの選択パターン数平均を見てみる。全体の場合、「二つ残っている」で選択パターンの数の平均が6.92、「前項か後項のどちらかが残っている」で11.08、「二つとも言い換え」では11.75である。ここから、前項動詞と後項動詞の意味が残っているほど選択パターンの数が少なく、言い換えの程度が大きいほど選択パターンの数が増えると言える。

次に複合動詞の種類ごとに、日本語習熟度による選択パターン数の平均を見てみる。「二つ残っている」での選択パターン数の平均は上位群が2.83、中位群が4.67、下位群が5.58で、日本語習熟度が低いほど選択パターンの数が多くなっている。「前項か後項のどちらかが残っている」では、上位群の選択パターンの平均が6.15、中位群の平均が7.08、下位群の平均が7.77となっており、「二つ残っている」と同様に日本語習熟度が低いと選択パターンの数が多くなっている。「二つとも言い換え」では、上位群は7.00、中位群は7.75、下位群は7.25となっており、中位群の選択パターンの平均が高い。ここから、「二つとも言い換え」は「二つ残っている」や「前項か後項のどちらかが残っている」と異なり、日本語習熟度が低いからと言って選択パターンが多くなるとは限らないと言える。

5.2 研究課題2：推測された複合動詞の意味の傾向

研究課題2「推測された複合動詞の意味にはどのような傾向がみられるか」について、どのような選択パターンに該当者数が多かったかという点から見ていく。表8は調査対象語ごとの該当者数が最も多かった選択パターンの一覧である。全体、上位群、中位群、下位群のすべてで該当者数が最も多かった選択パターンが共通しているものはその選択パターンのみを取り出した。全体、上位群、中位群、下位群のいずれかで該当者数が最も多かった選択パターンが異なる、もしくは該当者数が同数の場合、当てはまる選択パターンを全て載せ、該当者数の欄を網掛けにした。

表8 調査対象語ごとの該当者数が最も多かった選択パターン

			選択パターン			該当者数					
			単独	単文	複文	全体 (54名)	上位 (19名)	中位 (17名)	下位 (18名)		
二つ残っている	語彙	押し開ける	正答	⇒	正答	⇒	正答	23	11	7	5
		切り倒す	正答	⇒	正答	⇒	正答	45	19	12	14
		切り分ける	正答	⇒	正答	⇒	正答	32	13	10	9
		たたき割る	正答	⇒	正答	⇒	正答	13	9	4	—
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	22	8	6	8	
		運び入れる	正答	⇒	正答	⇒	正答	35	15	11	9
	統語	書き忘れる	正答	⇒	正答	⇒	正答	49	19	15	15
		聞き飽きる	正答	⇒	正答	⇒	正答	24	12	4	8
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	19	5	9	5	
		しゃべり続ける	正答	⇒	正答	⇒	正答	47	19	14	14
		出し遅れる	正答	⇒	正答	⇒	正答	22	11	7	4
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	12	2	5	5	
	使い慣れる	正答	⇒	正答	⇒	正答	43	18	13	12	
	話し終わる	正答	⇒	正答	⇒	正答	46	19	13	14	
	読み始める	正答	⇒	正答	⇒	正答	38	15	10	13	
前項か後項のどちらかが残っている	語彙	居合わせる	誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	正答	26	13	5	8
		誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	10	3	3	4	
		買い戻す	誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	9	4	4	1
		誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	誤答 (b)	8	3	1	4	
		捨てる	正答	⇒	正答	⇒	正答	20	11	5	4
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	23	5	9	9	
		出払う	正答	⇒	正答	⇒	正答	6	1	3	2
		誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	5	—	1	4	
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	12	9	3	—	
		泣き落とす	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	14	4	5	5
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	12	6	4	2	
		誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	誤答 (b)	8	—	2	6	
	飲み歩く	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	8	2	3	3	
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	11	5	4	2	
		誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	誤答 (b)	7	1	4	2	
		誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	正答	7	5	—	2	
		誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	6	—	2	4	
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	19	10	8	1	
	統語	笑い飛ばす	誤答 (a)	⇒	誤答 (b)	⇒	誤答 (b)	8	1	3	4
		歩き過ぎる	正答	⇒	正答	⇒	正答	34	16	11	7
		正答	⇒	正答	⇒	正答	5	3	2	—	
		数え直す	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	21	2	10	9
		誤答 (a)	⇒	正答	⇒	正答	6	3	1	2	
		頑張り通す	正答	⇒	正答	⇒	正答	39	14	12	13
助け合う		誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	4	—	—	4	
正答		⇒	正答	⇒	誤答 (a)	24	13	8	3		
泣き出す		正答	⇒	正答	⇒	正答	13	5	4	4	
誤答 (a)		⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	11	4	3	4		
登り切る		正答	⇒	正答	⇒	正答	15	9	3	3	
誤答 (a)		⇒	誤答 (a)	⇒	誤答 (a)	12	1	5	6		

		選択パターン			該当者数			
		単独	単文	複文	全体 (54名)	上位 (19名)	中位 (17名)	下位 (18名)
二つとも言い換え	語彙	あり付く	正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答	18	5	5	8	
			誤答 (a) ⇒ 誤答 (a) ⇒ 誤答 (a)	9	2	4	3	
	言い寄る	誤答 (a) ⇒ 誤答 (a) ⇒ 正答	5	3	1	1		
		誤答 (a) ⇒ 誤答 (a) ⇒ 誤答 (b)	7	3	1	3		
		正答 ⇒ 誤答 (a) ⇒ 正答	5	3	1	1		
		誤答 (a) ⇒ 誤答 (b) ⇒ 誤答 (a)	9	2	2	5		
	言い渡す	誤答 (a) ⇒ 誤答 (b) ⇒ 正答	4	3	1	—		
		正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答	8	6	1	1		
	行き渡る	誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答	18	6	5	7		
		正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答	19	8	4	7		
		誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答	21	8	7	6		

※表中の「—」は該当者なしを表す。日本語習熟度によって該当者数が最も多い選択パターンが日本語習熟度によって異なる場合や、該当者数が最も多い選択パターンが複数ある場合、すべての選択パターンを載せ、最も人数が多い個所を網掛けにした。

「二つ残っている」では、「押し開ける」「切り倒す」「切り分ける」「運び入れる」「書き忘れる」「しゃべり続ける」「使い慣れる」「話し終わる」「読み始める」の9語は、該当者数が最も多かった選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群のすべてで同じで、かつ、選択パターンは「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」であった。その他の「たたき割る」「聞き飽きる」「出し遅れる」では、「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」と「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」が、該当者数が最も多い選択パターンであった。

「たたき割る」「聞き飽きる」「出し遅れる」それぞれの選択パターンを日本語習熟度別に見てみる。「たたき割る」は「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」は上位群のみが該当者数が最も多く、中位群と下位群は「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多かった。「聞き飽きる」は上位群と下位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多く、中位群は「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多かった。「出し遅れる」は上位群と中位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が多く、下位群は「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が多かった。

ここから「二つ残っている」に関しては次のことが言えるだろう。まず該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で共通している場合、選択パターンは「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」となる。そのことから、推測される意味は意味推測時の文脈量や日本語習熟度による影響を受けにくく、常に同じ意味を推測すると言える。該当者数が最も多い選択パターンが日本語習熟度で異なる場合、選択パターンは「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」が多い。その

ことから、文脈からの情報が利用できない場合は正確に意味を推測できなくとも、文脈からの情報が利用できる場合にはどの日本語習熟度であっても正確に意味を推測できるようになると言える。

次に「前項か後項のどちらかが残っている」について述べる。「前項か後項のどちらかが残っている」では、「居合わせる」「歩き過ぎる」「頑張り通す」の3語では、全体、上位群、中位群、下位群で該当者数が最も多かった選択パターンが共通していた。しかし「二つ残っている」とは異なり、「居合わせる」は「誤答(a) ⇒ 誤答(b) ⇒ 正答」、「歩き過ぎる」は「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多かった。

「買い戻す」「捨て去る」「出払う」「泣き落とす」「飲み歩く」「笑い飛ばす」「数え直す」「助け合う」「泣き出す」「登り切る」は、全体、上位群、中位群、下位群のいずれかで該当者数が最も多かった選択パターンが異なっているか、複数の選択パターンの該当者数が同数であった。このうち、選択パターンが3つ以上ある「買い戻す」「出払う」「泣き落とす」「飲み歩く」「笑い飛ばす」「数え直す」のうち、「買い戻す」「出払う」「泣き落とす」「飲み歩く」「笑い飛ばす」では、「誤答(a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」が上位群や中位群で最も該当者数が多い選択パターンとなっていた。「数え直す」は上位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」と「誤答(a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」が該当者数が最も多い選択パターンであった。

選択者数が最も多い選択パターンが日本語習熟度で異なっていたのは、「捨て去る」「助け合う」「泣き出す」「登り切る」であった。この4語のうち、「捨て去る」「登り切る」は上位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多い。中位群や下位群で選択者数が最も多かった選択パターンは、「捨て去る」が「誤答(a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」、「登り切る」が「誤答(a) ⇒ 誤答(a) ⇒ 誤答(a)」である。

残りの「助け合う」「泣き出す」のうち「泣き出す」では、下位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」と「誤答(a) ⇒ 誤答(a) ⇒ 誤答(a)」の該当者数が同じであった。「泣き出す」の上位群と中位群では「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多かった。「助け合う」は上位群と中位群で「正答 ⇒ 正答 ⇒ 誤答(a)」の該当者数が最も多く、下位群で「誤答(a) ⇒ 誤答(a) ⇒ 誤答(a)」の該当者数が最も多かった。

ここから「前項か後項のどちらかが残っている」に関して、次のことが言えるだろう。該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で共通している語の数は多くない。かつ、選択パターンも「正答 ⇒ 正答 ⇒

正答」だけでなく「誤答 (a) ⇒ 誤答 (b) ⇒ 正答」のような誤答が含まれ、かつ意味推測条件で選ばれる選択肢が異なるパターンも見られる。該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で異なる語の場合、「正答」が含まれる選択パターンは日本語習熟度が高いほうが該当することが多い。

「二つとも言い換え」では「あり付く」のみ全体、上位群、中位群、下位群のすべてで該当者数が最も多かった選択パターンが共通しており、「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」が該当していた。「言い寄る」は全体、上位群、中位群、下位群のいずれかで該当者数が最も多かった選択パターンが異なるか該当者数が同数の選択パターンが6つあり、表7に示した「言い寄る」の選択パターン数の半分を占める。また、「正答」が含まれる選択パターン（「誤答 (a) ⇒ 誤答 (a) ⇒ 正答」「正答 ⇒ 誤答 (a) ⇒ 正答」「誤答 (a) ⇒ 誤答 (b) ⇒ 正答」）は上位群でのみ該当していた。

「言い渡す」「行き渡る」では「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」と「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が上位群で同数であった。中位群と下位群については、「言い渡す」は中位群と下位群の該当者数が「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」で最も多かった一方、「行き渡る」は、中位群が「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」、下位群が「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が最も多かった。

ここから「二つとも言い換え」については次のことが言えるだろう。「前項と後項のどちらかが残っている」と同様、該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で共通している語の数は多くない。また、上位群に「正答」が含まれる選択パターンの該当者数が多い傾向にある。

6. 考察

6.1 研究課題1 推測される複合動詞の意味はどのように変わるか

研究課題1「前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかによって、推測される複合動詞の意味はどのように変わるか」について検討する。調査対象語ごとに選択パターンの数を集計したところ、前項動詞と後項動詞の意味が残っているほど選択パターンの数が少なく、言い換えの程度が大きいと選択パターンの数が多いという傾向がみられた。日本語習熟度別に見てみると、「二つ残っている」と「前項と後項のどちらかが残っている」では日本語習熟度が低いほど選択パターンが多くなるが、「二つとも言い換え」では下位群よりも中位群のほうが選択パターンの平均が高く、日本語習熟度が低いからと言って選択パターンが多くなるとは限らないということが明らかとなった。

まず、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかという点と選択パターンの数の関係について考えてみたい。複合動詞を対象にした語の意味推測研究では、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかが意味推測の正確さに影響することが明らかとなっている（谷内 2012, 2019；谷内・小森 2009）。前項動詞と後項動詞の意味が残っているほど選択パターンの数が少ないのは前項動詞と後項動詞の意味から当該の意味を導き出すことができるためであり、前項動詞と後項動詞の意味が残っていない語ほど選択パターンが多いのは、前項動詞と後項動詞の意味から当該の複合動詞の意味を導き出せない分を文脈からの情報で補わないといけないためである。しかし、語の意味推測において文脈からの情報が重要な役割を果たすと言っても、実際には正確に意味を推測するうえでは文脈からの情報のみでは不十分である（Stein 1993）。意味を推測する過程では意味の候補が複数挙がるものの、文脈からの情報では候補を絞り込むことは難しい。そのため、文脈からの情報を頼りに意味を推測する必要がある「前項と後項のどちらかが残っている」「二つとも言い換え」では選択パターンが多くなったのであろう。

次に日本語習熟度と選択パターンの数の関係について考える。「二つとも言い換え」と、「二つ残っている」および「前項と後項のどちらかが残っている」では若干傾向は異なるものの、全体的には日本語習熟度が低いほうが選択パターンの数が多くなっている。複合動詞の意味を正確に推測するうえで必要なものは、「二つ残っている」では前項動詞と後項動詞のもとになっている単独動詞の意味、「前項と後項のどちらかが残っている」および「二つとも言い換え」では文脈を理解するための語彙知識や文法知識である。一般的に日本語習熟度が高いほうが語彙知識や文法知識も豊富であり、前項動詞と後項動詞のもとになっている単独動詞の意味の意味も既知の場合が多い。そのことから、日本語習熟度が高い場合は意味を推測する過程で出てきた意味の候補の正誤を判定することが容易であるが、日本語習熟度が低いと意味の候補の正誤を判定するための知識や情報に乏しいと考えられる。そのため、日本語習熟度が低い場合は誤って推測した意味を棄却することが困難で、選択パターンの数が多くなったのであろう。

6.2 研究課題2 推測された複合動詞の意味の傾向

研究課題2「推測された複合動詞の意味にはどのような傾向がみられるか」について検討する。該当者数が最も多い選択パターンを検討したところ、「二

つ残っている」と、「前項か後項のどちらかが残っている」および「二つとも言い換え」では傾向が異なっていた。「二つ残っている」では該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で共通している場合の選択パターンは「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」であった。該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で異なる場合の選択パターンは「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」および「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」で、日本語習熟度が高いほうが「正答 ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が多く、日本語習熟度が低いと「誤答 (a) ⇒ 正答 ⇒ 正答」の該当者数が多いという傾向がみられた。

「前項か後項のどちらかが残っている」および「二つとも言い換え」では、該当者数が最も多い選択パターンが全体、上位群、中位群、下位群で共通している語が少なかった。また、全体、上位群、中位群、下位群のいずれかで該当者数が最も多かった選択パターンが異なっているか、複数の選択パターンで該当者数が同数である語の場合、「正答」が含まれる選択パターンの該当者数が多いのは、日本語習熟度が高い場合に多い傾向にあった。

「二つ残っている」と、「前項か後項のどちらかが残っている」および「二つとも言い換え」では該当者数が最も多い選択パターンの傾向が多少異なるものの、日本語習熟度が高いと「正答」が含まれる選択パターンの該当者数が多いという点は共通していると言える。語の意味を推測する過程は推測した意味を様々な情報や知識と照らし合わせて検証する過程である (Huckin & Bloch 1993)。推測した意味を検証する中で、推測した意味が誤りであると判断された場合には新たに意味を推測し、新たに推測した意味を検証する。日本語習熟度が高い場合は推測した意味の検証に必要な語彙知識や文法知識が多い。そのうえ、語彙知識や文法知識は意味推測の検証に有用な文脈からの情報を得る際にも必要である。そのことから、日本語習熟度が高いと意味推測の過程での推測した意味の検証に有利であり、日本語習熟度が低い者よりも推測した意味の検証の負担も小さいと考えられる。そのため、日本語習熟度が高いと推測した意味の検証を複数回行うことが可能となり、日本語習熟度が高いと「正答」が含まれる選択パターンの該当者数が多くなったと考えられる。

7. まとめと今後の課題

本研究では多肢選択式を用いて、日本語学習者が推測する複合動詞の意味がどのように変わるかを、前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているか、意味推測時の文脈量、日本語習熟度のそれぞれの関係から検討した。その結果、

①前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているかが選択パターンの数に影響すること、②日本語習熟度の高低が選択パターンの数に影響すること、③日本語習熟度が高いほうが「正答」を含む選択パターンの該当者数が多くなること、の3点が明らかとなった。選択パターンの数と前項動詞と後項動詞の意味がどの程度残っているか、選択パターンの数と日本語習熟度の高低、日本語習熟度と「正答」を含む選択パターンの該当者数は一定の関係があると言える。語の意味を推測する過程では、学習者が持っている語彙知識や文法知識、文脈から得られた情報などと照らし合わせながら、推測された意味の正誤の検証が行われる。そのことから、選択パターンの数や選択パターンの特徴は意味推測の過程での推測された意味の正誤の検証の難易を反映していると考えられる。

本研究の今後の課題は次の二点である。一点目は記述式においてどのような意味が推測されるかの検討である。多肢選択式は採点が簡便である一方、選択肢の提示により推測の方向性を制限してしまうという欠点を持つ（森 2004；谷内・小森 2009）。記述式で実際に書かれた意味を分析することで、複合動詞の意味推測の特徴をより詳しく明らかにできるだろう。

二点目は実際の意味推測の過程の検討である。本研究では意味推測条件ごとに「どのような選択肢を選んでいるか」という点から意味推測の特徴を探ったが、実際にどのような情報を利用しているのか、どのような情報が意味推測に貢献しているのかといった意味推測の過程を、選択パターンの分析から明らかにすることは難しい。発話プロトコルの分析などを通して複合動詞の意味推測の過程をより精緻に明らかにすることができれば、複合動詞だけでなく語彙指導全般において、貴重な知見を得ることができだろう。

注

- 1 SPOTは学習者の総合的な日本語能力を短時間で測定するテストで、現在は『筑波日本語テスト集』として利用可能である。

参考文献

- ヴォイニコヴァ・マリヤナ（2017）「日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究—母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに—」『日本語・日本文化研究』27, 89-97.
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社出版
- 何志明（2010a）「香港の上級日本語学習者による日本語複合動詞の習得に関する調査」『東

- 洋文化研究』12, 510-491.
- 何志明 (2010b) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』 笠間書院
- 郭括・徳井厚子 (2010) 「中国人学習者の日本語複合動詞に関する意識・習得調査」『信州大学教育学部研究論集』2, 73-86.
- 格フレーム検索 <<http://reed.kuee.kyoto-u.ac.jp/cf-search/>> (2020年4月23日参照)
- 現代書き言葉均衡コーパス少納言 <<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>> (2020年4月23日参照)
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 小森由里 (2015) 「日本語教科書における複合動詞—立教大学文法教科書の分析」『日本語教育実践研究』2, 55-67.
- 陳曦 (2010) 「第二言語としての二種類の複合動詞の習得—コーパスによる学習者の使用実態調査をもとに—」『ことばの科学』23, 19-35.
- 筑波日本語テスト集 | TTBJ <<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/>> (2020年4月24日参照)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 照山法元 (2009) 「日本語教育における複合動詞「～出す」の学習語彙の選定」『早稲田日本語研究』18, 25-34.
- 永井鉄郎 (1996) 「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88, 140-151.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 姫野昌子 (2001) 「複合動詞の性質」『日本語学』20, 6-15
- 松田文子 (2000) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65
- 松田文子 (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」『日本語教育』111, 16-25.
- 松田文子 (2002a) 「複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察—」『言語文化と日本語教育2002年5月増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』170-184.
- 松田文子 (2002b) 「日本語学習者による複合動詞「～こむ」の習得」『世界の日本語教育』12, 43-62.
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学教育研究所, 69-86.
- 森美子 (2004) 「『講演録』語意推測方略の個人差」『言語文化と日本語教育2004年11月増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線—2004年版—』14-37.
- 谷内美智子 (2012) 「後項動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴—文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—」『言語文化と日本語教育』44, 1-10.
- 谷内美智子 (2019) 「日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の正確さ—記述式の場合—」『小出記念日本語教育研究会論文集』27, 5-20.
- 谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142, 113-122.
- Huckin, T. & Bloch, J. (1993) Strategies for inferring word meaning in context: A cognitive model, In T. Huckin, M. Haynes & J. Coady (Eds.), *Second language reading and vocabulary learning*, Norwood, NJ: Ablex, 153-178.

Stein, M. J. (1993) The healthy inadequacy of contextual definition, In T. Huckin, M. Haynes & J. Coady (Eds.), *Second language reading and vocabulary learning*, Norwood, NJ: Ablex, 203-214.